

市民文芸

歌壇

岩崎 聰之介 選

今日もまた鎌小川に洗ひあげごくらうさ
んと納屋に立て掛く 阿部みさ子
ジャブラニのごとくブレブレ我がころ南ア
で俺も蹴つてもらおか 村上 英俊
眠りより覚むるを待ちて百三歳祝えば母は何
やら答ふ 石田みどり
終戦の玉音聴きは二十歳の日兄も義兄もつ
いに帰らざりき 阿部はぎの
食事後は直ぐに片付け済ますべしと姑の言い
しを守りて来たり 高子うこん
草原を旅するよな茶の毛虫草取りやめてし
ばし見送る 佐藤 啓子
梅雨晴れの物干し竿を占めたるはシートなら
んか眩しくひかる 鈴木 茂子
長き親友案内板を二日立て何も語らず千の風
になる 後藤今朝雄
瀬の間の河鹿の声を愛でながら露天風呂にあ
り明日を預わす 斎藤 典子
朝まだき仏間にひとり手をあはせけふ事なき
をひたすら祈る 鈴木久美子

評 一首目、清涼感がいい。いたわりの言葉は、自身へのものである。

二首目、「ジャブラニ」はワールドカップで使ったボールの名、無回転ではボール変化が大。見定め難い自分をなぞらえて戯画化。三首目、きつと感謝のおこころを述べられたのであろう。一、二句が生きている。

俳壇

遠藤 秋尾 選

翡翠の一閃光でありにけり 跡部祐三郎
球児らのグラウンド均す玉の汗 岩松 隆志
うら口の風が一番半夏生 高子うこん
サッカーのテレビ果てたり遠蛙 岩澤 伍峯

風間市長の風のそよぎ

「お祭り」

今年も、札幌市白石区と海老名市の夏まつりに参加してきました。それぞれの夏まつりに特徴のある夏まつりで、いずれも本市と同じく実行委員会を組織して運営され、「住民による住民のためのまつり」だと強く感じました。周辺の市区町からも多くの客が集まり、限られたスペースの中で熱気と盛り上がりを感じてきました。

白石区の夏まつりは、区役所の大駐車場を会場に、その一辺にステージを設置し、中央部にはたくさんさんの机といすを配置、それらを囲むように残りの三辺には、テント一張りくらいのお店が数多く出店されます。出店は飲食物が多く、来場者がそれらを購入後、中央のテーブル席に持ち寄り仲間同士で昼間の大空宴会が始まります。

ステージでは、ひよつとこ踊りや太鼓の演奏など、日ごろの練習の成果を披露する発表会が行われました。そして、何より圧巻だったのが、都はるみさんが歌う「白石音頭」の曲に合わせて、中央テーブル席と店舗の間で踊る大盆踊り。ゆかた姿の婦人会の方々が手本となり、会場にいる老若男女が自由にその

輪に入り、ともに踊るのですから大人数での盆踊り大会です。それも午前中の晴天の下ですのど、少々驚きます。また、ビール片手に応援する観客がその周りを囲んでいるのですから、踊り手、観客ともに大きな輪で一体となって自分なりの刻を楽しんでおり、とてもすてきな光景で印象に残りました。

海老名市の夏まつりは、市役所わきの多目的大スペースを会場に、その半分に5〜6列のテ



▲第2回鬼小十郎まつりの様子

ントが張られ、飲食・名産品・野菜・古着など多種にわたる出店が並びます。もう半分の中央にステージが設置され、それを取り囲むように、16基の各地区自慢の山車が並び、その間のスペースを6基の御輿が練り歩きます。海老名市では、まつり会場まで山車や御輿が市内をパレードしながら入場してきます。メインはやはり、ステージを囲んでの夕刻からの盆踊りです。特に今年天候の心配から、例

年、盆踊り終了後に開催されていた花火大会が盆踊りと同時刻に開始され、花火をバックにした盆踊りは、見ている側からは夏の風物詩が一枚の動く絵に見える、素晴らしい空間が作り出されていったと思います。

本市でも、春・夏・秋とまつりが開催されます。おのおの独特の雰囲気やストーリーがあり、全国に誇れるまつりであるとともに、自分たちのまつりを自らが作り上げ楽しむために、市民が携わり、参加していることを誇らしく思います。

今年の夏まつりパレードは、台風の影響で残念ながら中止となりました。しかし、花火大会や各地区の盆踊りは盛大に開催されました。次は秋の「鬼小十郎まつり」が開催されます。白石区や海老名市のまつりの活気に負けぬよう、観客、参加者、そして運営する側がともに楽しく、元気で活力のあるひとときを作り上げてほしいと願っています。

柳壇

四電 英夫 選

一日の暗さにも馴れ梅雨最中
蒼天の鉄塔線や新樹光 福原 峯子
白南風に帽子のリボン揺れてをり 服部 忠孝
夕暮の咲けば逢ひたき人のあり 佐藤 啓子
女だけなりしと梅雨の一周忌 制野 リエ
五月晴れ洗濯物のそよぎけり 石田みどり
跡部 祐子

評 一句目、カワセミの魚を捕る一瞬を俳句に。

二句目、野球のグラウンドを均す生徒らの汗を写生。輝く汗の青春である。

三句目、7月2日ごろから5日間を半夏生という。半夏生という草もあり、このころより本格的な暑さがるのである。扇風機やエアコンの風よりも、風通しの良いうらさより

評 一句目、流れに浮かぶ泡沫のように、離れては結び、結びては離れる。混沌の政界を揶揄した時事吟。むべなるかな。

二句目、奇を衒わず、行雲流水なるがまま、なすがまま。平凡こそ最大の非凡。これが現代の処世術なのかもしれない。

三句目、テレビなし、賜杯なし、懸賞もまばら。未曾有の衝撃に晒された大相撲。国技の威信に掛け、失地回復の日が待たれる。

International Corner

国際コーナー



「My unforgettable 3 years in Shiroishi」

既に知っている人も多いと思いますが、7月末で白石での3年間の生活が終わりました。

2007年、私の人生を変える白い封筒がオーストラリアの実家に届きました。国際交流員の合格通知。そして、住む地域は宮城県の白石市…。聞いたことのない地名でしたが、日本に住む夢がかなうと思ったら、うれしくてたまりませんでした。早速、ウィキペディアで「白石」を検索したら、何と関西に住んでいる彼女の家から数百キロ離れている…。それでも、美しい冬の白石城や小原・鎌先温泉、スパッシュランドの花、夏祭りの様子などを見て、とてもワクワクして関西との距離も忘れしました。

2007年8月1日、真夏の白石に到着しました。1日目は、観光コース（お城など）を回って、これから住むアパートに連れて行ってもらいました。お世話になった上司（supervisor）の方は、その日から約3年間、私が仕事で失敗してもサポートしてくれて、お父さんのように面倒を見てくれました。

同じ年の11月、バンドを組みするひろばで初ライブを披露しましたが、そこでハプニングがありました。

ベーシストの友達が作ってくれた歌詞を僕が忘れてしまい、ライブをめちゃめちゃにしてみました。

それからいろいろな経験をしました。たくさんの方々にお世話になり、優しくしてくれて心から感謝しています。3年たった今、「白石」は日本のどこよりも心地いい場所です。いつか絶対白石に戻り、何かの形で皆さんに恩返しをしたいと思っています。

最後に、白石ならではの「心温まる話」を書きます。国際コーナーを読む方から、一通の手紙が職場に届きました。そこには、私がずっと見たかったホテルの居場所を記した、手書きの地図が入っていました（自然を守るため場所は書けません）。そこで念願のホテルをたくさん見ることができ、すてきな思い出となりました。

皆さんが僕を白石の一員として迎えてくれたので、かけがえのない日々を送ることができました。白石で過ごした3年間は、心の中に輝き続けます。寂しくなりますが、またチョコチョコ来るので、悲しくありません。3年間、白石の皆さん、大変お世話になりました！

I am so lucky to have lived in Shiroishi !!

*このコーナーは今月号で終了します。ご愛読ありがとうございました。

まちの話題

～あの日、あの時～

たった2日間、それは、忘れられない一生の思い出 登別・白石姉妹都市少年スポーツ交流「サッカー大会」

7月24日・25日の2日間、姉妹都市を結ぶ北海道登別市の子どもたちが本市を訪れ、サッカーを通じた交流を行い友好を深めました。

登別市から訪れた11人の子どもたちは、本市のサッカー少年団に所属する3・4年生の家にホームステイ。初めは、緊張した面持ちを見せていた両市の子どもたちも、「サッカー」という共通の話題ですぐにうち解けました。

大会後の感想では、「友達が増えてうれしかった」「別れるのがつらかった」などの声の子どもたちから聞かれました。2日間という短い期間ではありましたが、交流は楽しく、試合は真剣勝負！子どもたちにとって貴重な夏休みの思い出となりました。

登別市とは昭和58年に姉妹都市を締結。少年スポーツ交流を毎年相互に開催し、来年は本市の子どもたちが登別市を訪れる予定です。



▲1つのボールをひたむきに追いかける両市の子どもたち